夭折の天才少女詩人　海達公子

1. 海達公子を知っていますか？

1916（大正5）年長野県で生まれた海達公子（以下：公子）。父親の仕事の関係で、幼少の頃に荒尾に移り住みます。

荒尾北尋常小学校（現・万田小）に入学すると、自由詩や童謡を作り始め、全国的な児童文学雑誌「赤い鳥」などに投稿します。当時、日本の文学界を牽引していた北原白秋（柳川市出身）から「珍しい詩才の持ち主」と高い評価を受け、新聞や雑誌でも紹介されるなど、「天才童謡詩人」として日本全国に知られるようになりました。

学業も優秀で将来を期待されましたが、高瀬高等女学校（現・玉名高）の卒業式直後に倒れ、そのまま16歳という若さで亡くなりました。

その短い生涯の中で5千編の詩と300首の短歌を残し、ふるさと・荒尾の風景や自然を題材とした作品も多くあります。

『ばら』
まつかい
まつかい
ばらの花
目にはいつて
みるうちに
目つぶつて
母ちやんに
見せにいこ

『濱』
雨の上つた夕方
濱邊を行けば
千鳥がとぶよ
行く方に行く方に
なきなきとぶよ
向ふ地の山も
青々近ふ
山にかゝつた
白い雲
干潟にうつつて
光つてゐるよ

※海達公子の詩集・童謡集などは、市立図書館で借りることができます。（P32 をご覧ください）

2. 海達公子を現代へつなぐ人たち

一般社団法人海達公子顕彰会は、公子の顕彰活動を通して、歴史の中に埋もれていた公子の価値を現代によみがえらせています。活動の中心的存在である松山厚志さんに公子を顕彰する意義、活動の具体的内容、公子をまちづくりとしてどう生かしていくべきなのかについて話を聞いてきました。

まつやま・あつし　日の出町在住。2004（平成16）年、海達公子顕彰事業企画委員長に就任。2009（平成21）年、一般社団法人海達公子顕彰会を設立し代表理事に就任

公子の顕彰活動は無限の可能性を秘めていると思います。全国から人を呼べる存在になれば、荒尾の地域発展にもつながりますね

顕彰事業の始まり

公子の顕彰事業は公子の没後、何度か行われてきました。1981（昭和56）年の荒尾市文化連合会（文化協会の前身）の有志によるブロンズ像の建立や1997（平成9）年の県民文化祭では海達公子展などが行われてきました。また、公子に関する書籍が出版されるなどその存在は少しずつ広がりを見せていました。

松山さんが公子の顕彰事業に携わったのは、2004（平成16年）12月。市の協働のまちづくりの一環である「地域元気づくり事業」がきっかけです。「二小元気会は公子の地元なので、公子の顕彰事業は全国でもこの地区にしかできません。埋もれていた地域の宝を掘り起こせば荒尾の発展にもつながると思いました」と松山さんは話します。元気づくり事業を独立後、2009（平成21）年には一般社団法人海達公子顕彰会を設立し、代表理事に就任しました。

▲詩碑の建立は顕彰会の中心的事業の一つ。写真は第１号詩碑の『夕日』

顕彰事業の主な取り組み

公子の詩碑の建立と海達公子まつりの開催という主に2つの活動を中心に、取り組んでいます。

「イベントなどの事業だけでは、長期的に公子の顕彰を進めていくことが難しい。イベントが終われば顕彰事業も終わってしまうからです。詩碑のような形あるものとして残すことができれば、市民にとってより身近な存在になると思ったんです」

詩碑建立のアイデアのヒントを与えてくれたのは知覧特攻平和会館のある南九州市知覧町の石灯籠の街並み。「知覧町商店街を過ぎ、知覧特攻平和会館へ向かう道沿いにはたくさんの石灯籠があり、知覧にしかない風景を作っているんですよ」と松山さん。石灯籠は全国の人々からの寄付で建立されたものと知り、「寄贈という方法で市内に公子の詩碑を建ててみようと思いました」。同時に、荒尾の街並みと公子が詩歌を詠んだ情景を鑑賞できる、海達公子文学散歩道という詩碑散策コースを設定。「現在は、JR荒尾駅を起点にして、東コースと西コースの二つのコースを楽しめるようにしています」

海達公子まつりは、毎年3月に開催され、海達公子文学散歩道ウォーク&ラリー（以下ウォーク&ラリー）、児童文学展・美術展とその表彰式、